

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	蒲田観梅路上の話（承前）：雑録
Author(s)	化々山人
Citation	龍南會雑誌， 36： 28 - 32
Issue date	1895-05-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4566
Right	

り生ずるものにして火成岩の噴出するや其の礦物の成分たる灰土の一分炭酸を吸収して方解石を生ず斯の如く水及炭酸は外部より入りて以上の空房を充す所の礦物の成分となるものあり又水成岩と火成岩と相接する所に於ては接觸鑛脉 (Contact vein) と稱する一種の鑛脉を以て其の裂隙を填塞すること尠からず是れ火成岩の水成岩層を破りて迸發したる以來二種の岩石を組織する諸礦物互に交換作用を起して其の裂隙に種々の新成礦物を生ずるものとす而して此等の變化は火成岩の冷却に伴ひて起る所の顯象あれば其の礦物を新成するや水及び温度は之に缺ぐべからざる媒介物にして其の温度は從來の實驗に由れば敢て高きを要せず即ち斜方滾石 (Chabazite) 重十字石 (Hamotome) 及び方解石は華氏百十五度以上の温を以て生成すといふ (未完)

蒲田觀梅路上の話

(承 前)

化々山人

又最も好みて讀むは、墨子の書なり。清人の黃遵憲も、嘗て言へることあり、今の西洋の學は、墨子の學ありとあり。今、墨子の書を見るに、窮理の事かゝ、經濟學あやまで、實際に付きて言ふる論多く、大に益あるを覺ゆるなり。只漢唐以來、異端とか、邪學とかいひて、經濟あとの利にかゝりたる書は、盡く擯斥きて、讀まざるより、墨子あやをも退けて、誰一人注する者もなかりければ、其の書とんと讀むこと能はざるやうあれども、活眼一讀、墨子の精神、自ら行間に躍出するを覺ゆ。然るに、秦、六國を亡し、天下を郡縣とし、君主專制の政体を立てしより、天子の愛憎を以て、人を用捨し、何事も獨斷にて、權限もあく、憲法もなき、雜々の政体としたる處に、支那人は、元來、小黠にして、利を貪はる性あれ

は、君民の間に立てる汚吏どもの、始終害をなす事は、歴史に歴々たれば、かくの如き國がらにては、仁義を口癖にし、名利を禁物として、以て姦人の慾情を制遏せされば、成らぬこと、是又一往道理のあることながら、その弊害は、言ふに勝へざるものありて、天下の人、盡く弱愚となり、迂濶となり、先代の學者に勝ちて上らむと思ふ氣象も立たぬ有様とありたるは、物としては、修理せざるばあらぬ原則を知らざる故あり。今茲に、家あり、始めは皖として華やかなり、然れども、數年へて、手入せざる時は、その家を維持すること能はず。故に法律を立つれば、必ず改正といふことあり、學問をすれば、必ず未發の發明なくては、何の益かある。その家を維持する金錢を取る工面を知らずば、いふでか、その家を持ち、ゆくへき。道路劈開、水利疏通、荒蕪開墾の利便を圖らずば、いかでか富源を開くことをうべき。この道理を知らず、大切なる實際のことも、皆空談となり、天下の人に、達磨大師を學ばしむるやうに、言ひなすは、漢唐以來學者の弊ふまで、宋儒を尤甚しとす。その弊を我國に及ぼして、徳川二百餘年、宋儒の書にあらざれば、讀むことならずとの制規を立て、維新までの學者は、皆その説を遵奉して、知らずく、その學に浸染し、血に交はれば、赤くするの道理にて、いつしか、迂儒となり、我一家を治むることも、出來ぬ様にありゆき、今日に至りても、老人輩に事情に迂濶ある者のあるは、其餘毒の取れざるあり。歎はしきことあり。其朱子學の盛なりし時分は、彼徂來なども通才を抱きて、經濟學を唱へし人を指して、異端の學といひまは、捧腹に堪へざることなり。かくの如き、迂儒の輩出せる時代の書あるゆゑ、支那にては、宋以後の書、我邦にては、宋儒拜崇の學者の書には、一向に益あるをみず。元來、支那は逆なり、物は疎より密になるは、道理あるに、支那は密より疎に入る。學問の針路は、大事あるものにて、針路一たび轉すれば、東に行かん者は、西にゆき、南に行かん者は、北にゆく

あり。時勢此に至りては、誰一人其弊を言ふものなし。苟も言ふものあれば、忽ちその身を錮す。故に愚益愚にありゆきて、其はては、四書の註者を數へて、徒らに日を暮しゝものあるに至れり。是を皆言論の區域を縮めし罪によるなり。春秋の時分は衰へたれども、猶觀るゝ足るものあり。彼の鄭の子産、郷校を毀たむと言出づる者ありければ、郷校の書生、思ひ／＼執政の行へる事の利害得失を論ずるは、美事あり、善あればこれに従うて、吾が非を改めむ、惡ければ、取らすとも、民に恥かぬからじ、と答へて、毀たさうさとなむ。是れは、子産一人の了見にて、一概にも言はれざれども、春秋の頃は、王化の風をあせる、おのづからこの氣象ありしと著し。その一段溯りて、周の盛なる時分に立たる法度をみるに、今日の立憲制の様に、君にも禮あり、臣にも禮あり、上は上の權あり、下は下の權あり、下の者、上を論じたりとて、上の役人、妄はこれを罪することをえず。上の人、幾か程君の寵恩を受けたりども、罪ある時は、免かるゝことの相成らぬこと、殆ど火打箱にしきりを入れたるやうに、夫々禮を立てゝありしは、周禮をこても分るべし。古の禮は、今の法律にも當るゝ。孔子の常にやかましく、一にも禮、二にも禮といはれしは、是れなり、只、今の法律といさゝか異なる所は、道德を法律の中に、餘計に加味せしなり。周禮は、天子の法律あり、周の世に生れて、周の法律を知らずば、時の用をもあすことあたはず、その身の安寧をも保つこと能はぬは、今日に於て、下等社會の者と云ふども、夫々の規則條例や、治罪刑法の片端にても、知らねばならぬ理と異ならず。故に孔子も、人才を養ふよは、國家の典禮を述へて、これを誘き、或は用を節にすといひ、或は民を富さむといひて、經濟の道を説かれしは、さもあるべきことなり。まして、其時は、結構ある法制禮律の衰へたる世あれば、猶々うまびすく、説き立てられしなり。後世の學者は、古の禮をみて、只人に逢ひて、御禮する様あることをの

み禮ありと思ひしは、淺はうある見解とやいはむ。よく／＼一隻の眼を具へてミば支那の秦以前の書は、今日の用にも立つ所多かりぬべし。副島種臣公も、支那の書よては、周禮に限るといひて常にミつからも讀み、書生にも教授せられしと聞けり。公はさすがに、見る所ありけるにや、然れども、一隻の眼を具へざる人と語るべからず。亦復迂濶に陥ればあり。と息まきて、語りつゝ行けば、礪山風の身よしきて、品川宿にう出てにける。さて品川沖を望みて、米國のペルリが來りし頃は、此所いかゝありけむと、昔を忍び、今を思ひ、色々語りあひて、吉田松陰先生の事に談移つれば、一人が云ふ、先生の魯船に搭じて、西に航せんとて、佐久間象山翁に別を告げられしかは、翁は金四兩を餞別として呉られ、是れにてと申されたりとそきく。四兩の金を贈られまとは、抑いかある心うや、此の金よて洋行の出來るものと思はれけむ、當時の人の志氣をもて勝ちしは、所謂氣象崢嶸、光燄万丈とは、此等といふにや。といへるを聞き、海を詠めて、此言を思ひ、壯氣勃鬱、自ら制むること能はず、

我が心飛ひたつばうり吹きくるは八重の鹽路のあめりかの風

是時、もはや、入相の鐘を聞く頃にて、蒲田に至りければ、園中一樣に燈をかゝり。一人のよめる

日はくれて花の色だまらねどもめづる心は香にうありける

園中、數十本の梅樹あり、花も半ば綻ひ、清香鼻を撲つ。然れども、平地にうゑたる梅の樹なれば、何の趣もなく、眞に殺風景といふより外なし。蒲田の梅とて、人々強聒せければ、幾斗の風景にかと思ひしに、案に違ひて、かうやうの景色を、と思はれて、また小言の種の數をうへぬ。一体都會の人は、坐して居て、天下の人に交はり、天下より寄來る者のミを聞きて、意滿ち耳飽けるによりて、又他の大絶景を搜ぐるに暇あらず、またその近傍に觀るへき所も少なし、おれ此の凡景を賞する所以なり。余、去年

の秋、瀧川に遊びて、驚きしが、今復この景に驚きぬとて、茶も飲まず立去りて、ステーションに至れば、恰も瀧車の來りし時に遇ひ、直ちに乗り、車箱を見るに、憲兵一人あり、下る時に見れば、一人の賊をつれて居たり。哀はれに思ひて、

喘ぎゆく牛を尋ねし人もまたこの盗人をみる心ある

と口占めは、彌次北八の歌とては、上出来ありとて、人皆笑ふ、銀坐に至りて、夕食を喫し、學舎に歸りつきしは、九時あり、後の學びの爲めにもとて、審に記し、思へは物狂はき限り。

隙ゆく月日の脚はやみ、きのふのやうに思へども、この記をかきしるの時を、數ふれば、はや十二年前のむかしなり。今日にあれば、時勢もうつれば、議論にもうはる所なきにあらず、はかき一篇の記文も、殆ど一身の沿革史とはなりぬ。されど、十年へても、百年たちても、かはらざるものは、只々一片腦中の和魂といふ一塊物のみ。

(完)

五家庄途の記 (承前)

不老庵主人

鄙育ちの我等にさへ、千辛萬苦ある此山奥に、都上臈の御下向、御難儀は如何ばかりなりけむ。さて、御入山當時、何を食物に御命は維かれけむ。と申せば、そも此五家庄といふは、一種の奇地なり。此堺を出づれば、絶えて見ぬ草木あり。例へば草にては『ケドコ』、『セダラ』、『カナヅチ』、『カンネ』、葛根等其他栗實檉實等は固より多く、此等は何れも食にあまるもの故、差當りての食は、此等よてやありけむ。今も饑饉の時、貧民は此等をもて一食を濟ます故、乞食といふもの絶えておし。夏は筍をも食と